

2019年度 第48回 いしかわインテリアデザイン大賞 「大賞」

物件名	海月が雲になる日のための家具		
	所在地	金沢市	
設計者	甲斐 晋	Frey design	
	TEL		URL



別添

海月が雲になる日のための家具

築100年の町屋レストラン「海月が雲になる日」のために製作したアームチェアとテーブル。

当時から守られて来た群青の壁は「海空の間」と名付けられており、その店名と室名から、海月を意識した。

群青の間はラピスラズリ（青金石）を顔料として取り入れられており、当時から諸外国から輸入されている。また、既存の床にはブラックウォルナットが取り入れられていた。

故に、材としては構造的な強度、時代に好まれる質感と木目から、ブラックウォルナットを選定した。

座面には海月の傘を想像させる丸いクッションを提案し、ディテールには触手を取り入れた。

日本的な構造であるホゾ組、部材はひとつひとつ墨線を描き、数百の部材、数千の加工を手で削り出している。

椅子にとっては不都合である丸い座面を組み込む為に試作を繰り返し、組み上げられる寸法を模索している。

建築空間と合わせるため、また日本人の体型と合わせるため、椅子の高さをわずか抑えた上で、クッションの沈み込みも考慮した。この事はテーブルと椅子との高さの関係も再考することとなった。店舗に求められる耐久性、座面の簡単な取り替えの機能面も考えている。

椅子に求められる背もたれの傾斜、7度～10度の角度は、沈み込みと立ち上り易いことを考慮し、あえて傾斜をつけずフラットとした。ただし、座面が低い事でプロポーションが悪く見えるのを防ぐため、貫の寸法に傾斜をつけ、美しく見えるように工夫している。

椅子の多くは自重による負担により耐久性が変わり、重いものは壊れやすくなる。その事を踏まえて、立体的に角度はついているが構造的に優れている直線であり、強度を高めている。

塗装面では、従来のオイルフィニッシュでは汚れやすいため、現場の補修でも使用する事ができ食器にも使われる新しい塗料であるウレタンオイルを採用し、オイルフィニッシュのような自然の木の質感でありながら、衛生面や機能面に優れている塗料を選定した。

無垢の木、人間の手で作り上げるという古来の考え方を守りながら、インテリア空間と合わせる事を考え、用の美である「家具」をデザインした。

作品概要

海月 アームチェア／テーブル

寸法 W600mm D640mm H780mm

製作数 アームチェア 14脚 テーブル 4台

所在地 石川県金沢市長町 「海月が雲になる日」

材質 ブラックウォルナット (国内挽)

塗装 ウレタンオイル仕上げ (食品衛生法適合)

2019年度 第48回 いしかわインテリアデザイン大賞 「石川県知事賞」

物件名	金澤つきや		
	所在地		金沢市
設計者	戸井 建一郎 株式会社トイットデザイン		
	TEL		URL

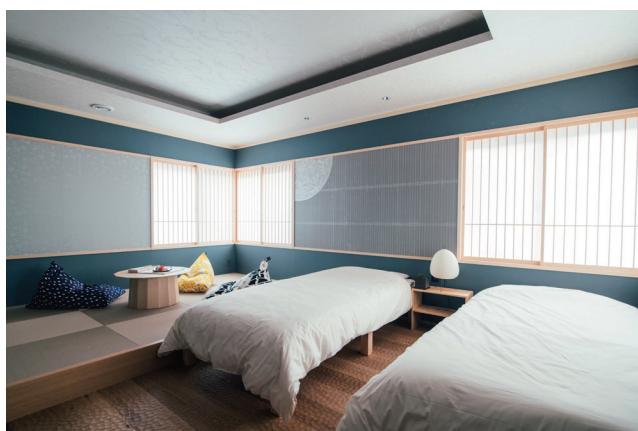


別添

金沢の中心市街地に現存する築約 130 年の町家を再生した日本料理店である。この界隈は時代とともに歓楽街へと変貌してきたが、本家屋は右隣にある畳店（金沢市有形文化財）と通り庇を揃える金澤町家の歴史的景観を保つ、今もなお残る数少ない遺構となっており、明治期前半に建造され米穀商を営んでいたといわれるこの家屋は非常に保存状態が良く、正面の連子格子には米穀の販売用に利用されていた特徴的な小窓が付いており当時の面影がそのまま残されていた。『金澤つきや』はこのような町家特有の伝統的な意匠に、現代的な感覚を融和させた空間づくりを念頭においていた。全体のフロア構成は、土間部分をテーブル席、座敷部分をカウンター席、坪庭を挟んで土蔵部分を個室とし、家屋の間取りに合わせて既存の構造体を極力残しながら計画した。通りに面するテーブル席は、既存の小屋裏を取り払い高天井として、格子や高窓の意匠が際だつ開放的な空間とし、約 6 m の朽無垢材で造られたカウンター席は、正面に配された伝統左官技術である大津磨きで仕上げられた「おくどさん」（竈の京言葉）での調理風景や、四季を感じる坪庭の情景を愉しめるような視覚的な演出を施した。さらに奥の土蔵は既存の蔵戸や窓周りの修復を行い、構造的な補強を加え吹き抜けとすることで、力強い架構を露わにした趣きのある心地よい個室空間をつくった。店内の内装は構造体を既存の風合いにあわせて補修し、炭入りの漆喰を施した壁や無垢材で造られた家具・建具、特注の照明器具など、工芸的な職人の手仕事により仕上げられている。外観は旧来の町家の意匠を残しながら、老朽化した箇所や既存のトタン張り部分を下見板張りにするなどの修景を行い、町家の風情を感じながら伝統料理を堪能できる食空間を創造した。昨今、町家が減失していくなか、このような伝統的建造物を積極的に活用し、今の時代に呼応した新たな価値を重ねて保全し、継承されていくことに期待を寄せたい。

2019年度 第48回 いしかわインテリアデザイン大賞 「金沢市長賞」

物件名	眠音 磯 /Ishizue (ネオン イシズエ)		
	所在地 金沢市		
設計者	積水ハウス株式会社設計課 石黒鳴子・金沢からかみ研究会代表 永嶋明		
	TEL		URL



別添

■概要

今年の4月にオープンした 眠音礎（ねおんいしづえ）ホテル。近江町市場に隣接する、一日二組限定の素泊まり宿です。インテリアの見どころは、『金沢からかみ文様』の壁面装飾。京からかみ・江戸からかみにならい、金沢らしいデザインを開発したのは、金沢からかみ研究会に所属する金沢表具の職人たち。伝統を守ることは、革新を続けること。そのシンプルで遊び心のあるデザインは、新築の現代空間に「アート」として融け込みます。金沢からかみを筆頭に、金箔工芸や桐工芸の照明・オブジェ・和紙アートで設えました。また、「もてなしの間」には、N P O法人アートグミから紹介いただいた金沢若手アーティストによる作品も展示。建物全体のテーマは雪月花。違い棚のある床脇をモチーフに、「おあつらえ」感ただよう空間としました。

■素材と出会い

「インスタ映え」「インバウンド」これらのキーワードを盛り込んだホテルをつくる上で、デザイナーが重要視したのは、「金沢らしさ」というオリジナリティ。山野市長のブログで紹介されていた「金沢からかみ」に注目したのがきっかけでした。

■現代空間に伝統工芸を取り込むための工夫

金沢ゆかりの文化と風土をモチーフにした金沢からかみ。それをさらに洗練された印象するために工夫したのは、色数を減らし、シルエットの美しさを強調すること。和紙はグレー、文様は雲母のシルバーに統一。インテリアの基本色もブルーグレーに白木というシンプルなコントラストで和モダンなティストを加速させます。ベースカラーで彩りを抑えた分は、和模様のカラフルクッションでアクセントをプラス。金沢のかわいらしさも表現しました。また、設計段階から鴨居や窓、建具の上端・下端のレベルを揃える事に徹底することで建築線の数を出来るだけ減らすことに成功。まるで額縁の中にアートを収めたかのような仕上がりとなりました。

■アートホテルから、旅のアクティビティへ

今や旅の目的は、モノよりコト。旅先でどのような体験を味わえるかが重要視される時代。この風潮をもって金沢工芸の業界振興の仕掛けはできないものでしょうか。サテライト方式のいわゆる無人ホテルでも旅行客の欲求を満たすには？まずは説明書きを宿に常設。金沢からかみは表具師による手しごとであり、その手しごとを体験できる場所が金沢職人大学校である。例えば、そのような事がQRコードを媒介にネットアクセスできれば、SNSを介して拡散も可能でしょう。手に触れ匠の技を感じ、伝統工芸を知るきっかけとなることを願います。